



タイトル Title	「日韓」の交流から「日韓」を超える交流へ - 政治学からの挑戦 日本政治学会・韓国政治学会交流事業
著者 Author(s)	木村, 幹
掲載誌・巻号・ページ Citation	日韓文化交流基金NEWS,29:5-5
刊行日 Issue date	2004-03-31
資源タイプ Resource Type	Article / 一般雑誌記事
版区分 Resource Version	author
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	
URL	<a href="http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90001579">http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90001579</a>

Create Date: 2018-08-14

# 「日韓」の交流から「日韓」を超える交流へ - 政治学からの挑戦 日本政治学会・韓国政治学会交流事業

木村幹 神戸大学大学院国際協力研究科助教授、日本政治学会日韓交流小委員会委員長

「日韓新時代」の到来と「未来志向」的な関係の必要が叫ばれはじめてから、ずいぶんになった。これまたよく言われるように、今日の日韓の間では、平均して1日1万人以上もの人々が行き来するようになっている。もちろん、交流の拡大は、政治学の分野にも及んでいる。かつては、韓国における日本留学経験者を中心に行われてきた両国の交流は、その様相を大きく変えようとしているように見える。韓国に日本留学経験者がいるのと同様に、今日の日本には韓国語を話す研究者が数多く存在するようになり、日本人と韓国人が韓国語で政治を議論することはもはや珍しいことではない。しかし、今日の交流はそのような次元にさえ留まらない。両国には、共に巧みな英語を操り、同じ「政治学」という学問分野において研鑽を積んだ研究者たちが存在し、共通の問題認識に基づき、活発に議論しはじめている。

このような研究者のあり方は、学会交流のあり方をも変えようとしている。これまで我々が議論してきたのは、主として日韓のいずれか、あるいは双方に横たわる具体的な問題についてだった。確かにそれは日韓交流が即ち、韓国における日本研究者と日本における韓国研究者の集まりであった頃にはそれでよかった。しかし、学問の国際化が進んだ今日では、人々の関心は、より抽象的な問題へと向けられている。明らかなのは、我々の交流が分岐点に差し掛かりつつあるということである。



交流セッション 左から1名おいて白鳥浩（法政大）、若畑省二（信州大）、馬仁燮（成均館大）、金浩燮（中央大）、姜明世（世宗研究所）の各氏

ある。

昨年12月4日に外交安保研究院（韓国・ソウル特別市）にて行われた、韓国政治学会研究大会における日韓両政治学会の交流セッションは、そのような今日の日韓両政治学会の交流を象徴するものであったと言えるかもしれない。このセッションにおいて事実上の共通テーマであったのは、今日の日韓両国における政治的クレーヴィッジ（対立軸）をどのように理解するか、ということであった。即ち、白鳥浩法政大学助教授の報告「日本政党システムの変容」は、ロッキンの政治理論を基礎に、日本政治について議論したものであり、また、若畑省二信州大学講師の、「民主化以前の韓国選挙における与村野都構造と韓日比較分析の可能性」は、朴正熙政権期の「与村野都」（農村部では与党の当選率が高く、都市部では野党が高い現象）的政治構造について、数値的データを用いた分析を行った。これに対して、韓国側からは、馬仁燮成均館大学校教授が「社会

構造の変化と民主主義の定着」という表題の下、韓国の現状分析を行った。

重要なのは、こうして研究者たちが日韓の事例をそのものとして扱うのではなく、そこから何らかの学問的意味合いを汲み取ろうとしていることである。そのことは、従来は特定の問題に拘泥し、時として議論のかみ合わない傾向さえあった日韓両国の政治学会の交流を大きく変えつつあるように見える。日韓両国の政治学会が、何を共に研究し、何を世界へと訴えかけてゆくのか。それが単なる日韓の交流に留まらず、政治学という学問そのものの発展へとつながることを願ってやまない。



きむら かん

京都大学大学院法学研究科修士課程修了。愛媛大学法文学部助手、同講師を経て、1997年より現職。著書に、『韓国における「権威主義的」体制の成立』（ミネルヴァ書房、2003年）『朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国」意識』（ミネルヴァ書房、2000年）ほか。